

# 箱根駅伝に 魅せられて

文／生島洋  
写真／松澤孝順

小学生のときにラジオで箱根駅伝に触れ、スポーツを書く世界に飛び込んでから、しばらく経って上梓した書籍が、筆者を箱根駅伝取材に誘った。将来の日本を背負って立つ選手、このレースを最後に引退する選手……青山学院大の優勝で幕を閉じた第98回箱根駅伝も、いろいろな思いを持った学生たちがたすきをつないだ。

## 風向きを変えた 一冊の本

箱根駅伝を取材している限り、家族と一緒にのんびりと過ごすお正月は迎えられない。私の人生のなかで「箱根駅伝」の持つ意味は大きく変化してきた。はじめて箱根を「聴いた」のは小学校4年生の時だから、1978年のことである。日本テレビが箱根の生中継を始めたのは1987年のことで、それまではNHKラジオ第1でレースを聴くのが楽しみだった。1978年の目当ては、ひと月前の福岡国際マラソンで5区に入っていた早稲田大学の湘吉利彦だった。

そのラジオにしても、完全実況ではなかったが（1区は生中継して、そのあとは1時間ごとにレポートが入り、5区になると再び実況に戻るスタイル）、音だけの箱根は小学生の私の想像力を広げてくれた。

そして大会終了後は『月刊陸上競技』と『陸上競技マガジン』を比べ、より興味深い記事が載っている方をお年玉で買っていた。つまり、小学生の私にとって箱根駅伝は憧れの対象であり、大学選びにも大いに影響した。

長じてスポーツを書く世界に飛び込んでから、箱根駅伝について書く機会はなかなか訪れなかった。2000年代は、いまだ箱根

大会史上最速の10時間43分42秒で総合優勝した青山学院大学。中倉啓敏（10区）が大手町を駆けける

駅伝が全国的に注目されるコンテンツだというわけではなかったからだ。ただ、2005年に『駅伝がマラソンをダメにした』（光文社）という本を出してから風向きが変わった。この本は、駅伝とマラソンを両立させていた湘吉利彦に憧れていた私にとって、1990年代以降、なぜ両立を志す選手、指導者がいなくなったのか？ という疑問をそのままぶつけた本だった。取材は一切なし。小学生の時から記憶と、現役を外から眺めて分析したもので、陸上を書いて暮らしているわけでもない、「出鱈目」になってもいいと思つて書いた本だった（そもそも、記者室に踏み入れたこともなかった）。

ところが、人生は分らない、これがきっかけとなって監督、選手たちに取材が出来るようになった。駒澤大の大木弘明監督に取材に行った時には、「生島さん、読んでよ」と言われたので怒られるかと思つたが、「批判はもっとも。ただ、駒澤は世界を目指してやってくるから、それは見て欲しいな」と言われた。ありがたいことに、監督たちが私を受け入れてくれたことで、毎年のように箱根駅伝を取材する生活が始まった。

## 驚くべき 青学大の表現力

私にとって大きな刺激となったのは、青山学院大だった。2011年に書いた『箱根駅伝』（幻冬舎新書）を部員が読んでくれ、当時流行り出したツイッターに感想を上げてくれた。こんな調子だった。

「監督が、書いていることの割は当たっているけど、2割は違うなとのこと」  
監督とは、阪神監督のことだ。では、2割はどこの誰うのかと気になり、取材を申し込むとあっさりとお応じしてくれ、そこから青学大との付き合いが始まった。

青学大はこの10年間でもしっかり成長したチ







往路は駒売本社前をスタート



1区は高部大和(中央大)が引く張った



3区・太田善生から4区・飯田貴之へ(青山学院大)



3区の丹所健(東京国際大)は日本人最高記録で区間賞に



2区・手島駿(中央大)の視線を反目に追い抜く田澤廉(駒澤大)

1ムだ。2022年大会では15時間43分42秒の大会新記録をマークし、その進化形態を見せた青学大だが、このチームには変わらないことがある。

「ナントカ力」に代表されるような原監督のコメントだけでなく、選手たちも1年生の時からしっかりと受け答えが出来るので、話を聞いていて楽しい。これは部の風土もさることながら、そうした選手を選んでリクルートしていると原監督はいう。

「高校の県大会、ブロック大会に勧誘に行くじゃないですが、そこで選手と実際に話してみると、だいたいの性格、人間力が分かるんですよ。これはひと昔前の話だけれど、超名門校に行ったら、やたらと返事がいわずに、『ハイ、ハイ』って、なを聞いても『ハイ』って返事をすると、『どうしてハイって返事をしているの？』と聞いても、『ハイ』って言ってきたからね。笑)。青学では、上の言うことに対して素直に返事をする学生は要らない。そういう選手が入ったとしても、苦勞するだけです」

これも原監督の経験値から導き出されたものらしい。就任当初、箱根に出るのを無るあに行ったら、やたらと返事がいわずに、『ハイ、ハイ』って、なを聞いても『ハイ』って返事をすると、『どうしてハイって返事をしているの？』と聞いても、『ハイ』って言ってきたからね。笑)。青学では、上の言うことに対して素直に返事をする学生は要らない。そういう選手が入ったとしても、苦勞するだけです」

「注目されることは、本志にうれいんです。より自分を追い込むことが出来ますから」  
そしてまた、このスキルを1年生が持っているというところが驚きだ。今年、優勝の立役者となったのは3区を走った太田善生だった。太田は夏合宿の時点から、話すことがとにかく面白かった。『選手としてはノーマルでは面白くないので、アプノーマルで行きたいと思えます』  
こんなことを言う1年生は、あまり会ったことがない。「あ、ひどい！大迫は早大1年の時、箱根駅伝に興味ないんでとさうって話して、度肝を抜かれた。太田の積極的な発想が、3区でトップに立っていたら、駒澤大、東京国際大といった優勝候補を置き去りするのは出来ない。史上最速だった青学大だが、今年のチームで4年生はわずか2人、8人が残るわけで、来年も本命であることに疑いはない。今年、キヤブテンを務めたのは4年連続で箱根を走った飯田貴之である。彼は過去4年のレースを細かくとらえて記憶している。その明晰さに驚かされる。その飯田が言う。『今年、10時間43分42秒と10年以内の10時間40分を切りたい』と言ったんです。単純計算するとあと22秒分、ひとりあたり22秒ほど縮めれば10時間30分が実現できます。このタイム、気象条件が悪いさえすれば、来年のチームは実現できるんじゃないかという気がしています。それほど、職力的に充実しています』

2022年、無双の強さを見せた青学大がさらに進化するというのか？他大学だって黙ってはいないだろう。  
「2024年、箱根駅伝は第100回大会を迎えますが、勝負に興味を持ってもらえるレース展開にしないと、さらなる発展はないと思っています」

と話すのは東洋大の酒井俊幸監督だ。  
「青学さんが強いのは重々承知していますが、最初から白旗を挙げちゃってしまえば面白くないです。ウチとしても描き加えを付けたいような陣容を作りたいと思っています」

箱根駅伝はチームの「総合力」を問う大会である。青学大は10人どころか、上位20人まで自分の隊もないチームを作り上げた。それでも、歴史を紐解いてみると、本心に描き加えを付けられる「エース」の存在が、流れや勝負の行方を左右することがあった。  
いま、箱根には将来の日本を背負って立つ選手がいる。

### エリート選手たち だけではない……

東京オリンピックの3000m障害で7位入賞という快挙を成し遂げた三浦龍司(順天堂大)は、今回は花の2区を走った。  
そしてその2区で留学生を抑え、区間賞を取ったのは田澤廉(駒澤大)だった。田澤は12月の日体大記録会の10000mで、今年7月にアメリカ・オレゴンで行われる世界陸上の参加標準記録を突破した。その時、大八木監督が話していた。  
「俺も、オレゴン行きてえんだよ」  
箱根で勝つことだけでなく、世界でも勝負できる選手を育てる。2000年代、箱根駅伝と世界は断絶しているように見えたが、いま「箱根から世界へ」という大会のコンセプトが、現実のものとなっている。

箱根駅伝を取付する身としては、どうしてもそうしたエリート選手たちに目を奪われがちだが、私が箱根駅伝を好きなのは、このレースを最後に引退する選手たちにもまた、ストーリーがあるからだ。  
今大会、10年ぶりにシード権を獲得した中央大学の2区を走った手島駿も、そのうちのひとりだ。  
手島は11月に行われた全日本大学駅伝でアンカーを務め、この大会でのシード権獲得に大いに貢献した。マラソンの日本代表でもあった藤原正和監督は手島の安定性を評価し、箱根では「汚れ役」を託すことにした。藤原



監督はその意図をこう話してくれた。

「中大としては、1区で吉居（大和・2020年日本選手権5000m3位）で揺さぶりをかけにいきます。吉居は区間上位でまとめてくれるはずなので、2区は『耐える』区間になります。それを頼めるのは手島しかないと思います」

実際のレースでは吉居が区間新を大幅に更新してトップでたすきをつないだ。藤原監督のプラン通りだ。果たして、2区ではどうなったか？ 手島は順位を11位に落としたが、本人はレースをこう振り返る。

「抜かれるのは覚悟していました。自分の10kmの通過タイムは29分10秒くらいだったので、自分のキャリア的には相当速いタイムで通過しているんです。でも、駒大の田澤君には8km地点で抜かれてしまい、『どれだけ速いんだ？』とびっくりしました。東京国際大のヴァインセント君、青学大の近藤幸太郎君、みんな速かったです。見栄えは悪かったかもしれませんが、自分としては役割を果たして3区につなげたので良かったと思います」

手島の粘りが、名門中大のシード権復活に寄与したのは間違いない。

中大を卒業する手島は、一般企業に就職するので競技の第一線からは離れる。箱根駅伝が終わってからは埼玉の実家に帰り、のんびり暮らしているという。

「大会が終わってから、一度しか走ってなくて。あ、自分は走るのが好きじゃないんだなと気づきました（笑）」

いろいろな思いを持った学生が、たすきをつなぐ箱根駅伝。小学校の時にラジオで聴いて感じていた熱を、いま取材の現場で感じるようになった。

正月がめぐってくるたび、そのありがたさを実感している。



大手町に先頭で帰ってきた中倉啓敦(青山学院大学)



15年ぶりに1区の記録を塗り替えた吉居大和(中央大)